今年の10月7日に東京理科大学野田キャンパスにおいて第62回体育祭が開催される。今回、東京理科大学体育祭実行委員会委員長の太田博理さんに取材し、今大会の見どころや意気込みなどを聞いてみた。

学校の一大行事である体育祭は本学でも行われるのだが、神楽坂キャンパスにおいての知名度はあまり高くない。開催場所が野田キャンパスで飯田橋から距離があり、参加者がそれほど多くないのも事実だ。また、体育祭自体が団体戦というのも相まって、個人で参加する人が少なくなっている。しかし、「今年は個人で参加しても楽しめる体育祭である」と太田さんは語る。今年の体育祭は「団体の枠を超える体育祭」をスローガンに掲げている。今までの体育祭は参加団体ごとや、野田キャンパスの学生同士で固まって行動することが多かった。今年は個人の交流を念頭に置き、学生同士の親睦を深め、個人で参加しても体育祭を楽しめるようになっている。例えば、チームの色分けをする際、今までは団体で参加すると団体ごとに色分けをしていたが、今年からは個人ごとに色分けをすることになった。よって、一人で参加している人でも体育祭中に参加者同士で交流できる状況が多くなっている。様々な競技がある中でも、今年一番の見どころは全チーム一斉に行われる騎馬戦であると太田さんは一押しする。騎馬戦というと、色分けされたチーム2色で戦うのが一般的だが、今年行われる四つ巴騎馬戦は一味違う。四つのチームの全騎馬が、サバイバル形式で戦い、残った数の多い方が勝ちである。四つのチームが一斉に戦う様は、参加する人数の多さから圧巻の一言に尽きる。参加しても観戦してもその場でしか味わえない迫力があるだろう。

また、毎年行われる後夜祭にも見どころは沢山ある。即席ステージによる吹奏楽部や和太鼓サークルの演奏、更にはビンゴ大会もある。昨年のビンゴ大会の商品はプレイステーション3や3DSなど豪華な賞品が用意されていたので、是非ビンゴ大会に参加してみてほしい。そして、後夜祭の一番の目玉は今年から復活する打ち上げ花火である。昨年は東日本大震災の影響により自粛を取り決めたが、今年から再開することになった。市販されているような小さい花火を扱うのではなく、打ち上げ花火専門の業者に作成を依頼しているため、大学の体育祭とは思えない程大きく、本格的な花火が打ち上がる。また、一般的な花火大会と違い大学のキャンパスで行うため、混雑することがなく非常に近い距離で見ることができる。ほぼ真上に打ち上がる花火は他では滅多に体験できないだろう。

当日の受付にて、その場で出場するチームの色のTシャツを受け取り、体育祭にすぐに参加することができる。個人でも楽しみやすいので、大学で運動する機会が比較的限られている神楽坂キャンパスの学生は、是非とも運動不足やストレス解消のために一度体育祭に参加してみてほしい。体育祭に参加していない人でも、後夜祭だけに参加することもできる。お祭り感覚で演奏、ビンゴを楽しみつつも、屋台で買った食べ物を手に取り花火を見るのもいいだろう。体育祭、後夜祭の楽しみ方は人それぞれだが、満足するイベントには違いない。

野田キャンパスで行うため、神楽坂キャンパスに通う人からすれば少々遠く感じるかもしれないが、一年に一度の祭りである。そこでは、知らなかった隣の人とも打ち解けて、雑談し合い、一緒に応援しているかもしれない。「神楽坂キャンパスの学生の参加を心待ちにしている」と太田さんは語った。

▲綱引きの様子

▲鉄人レース予選の腕立て伏せ

秋の香りが漂い、一人しみじみと木々を見たり、温かい飲み物を飲みながらホッとしたりする季節になってきた。この季節は何となく「一人の時間」を意識するもだ。そこで今回は、そんな「一人の時間」の頼もしいお供、本の紹介する。

泣ける2ちゃんねる

あの超有名サイト2ちゃんねるに書き込まれた泣ける話ばかりを集めた本がある。タイトルはその名の通り『泣ける2ちゃんねる』だ。初版が発売されたのは2004年で少し古い本ではあるが、翌年には『泣ける2ちゃんねるII』、2007年には『泣ける2ちゃんねるIII』が発売されており、絶大な人気が伺える。

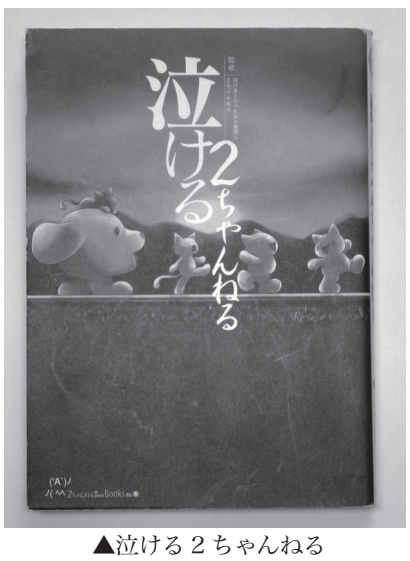
この本は小説等とは違い、ネットユーザーが書き込んだ文章をそのまま引用した作品になっている。そのため2ちゃんねる独特の用語も使われており、分かりづらいと感じる箇所も多々見られる。しかし文庫本に比べると字は大きめなので、長々と細かい字を読むことが苦手で日頃あまり本に触れない人でも大変読みやすくなっている。また、この本は240ページもあるが、一つひとつの話は1ページ程度で完結しているので1分もかからず一つの話を読み終えるため、電車の待ち時間や学校の休み時間など、ちょっとした空き時間にも読むことができる。

この本は11章から構成されており、全部で200話ほどの話が収録されている。両親が子供を、子供が両親を思う気持ち。兄弟という特別な絆。いつもそばにいてくれる大切な友人。恋人との出会いと別れ。ペットの主人に対する無垢な心。そんな身近に感じる話が数多く掲載されている。これだけの話が載っているのだから、この本に書かれている事と同じような経験をした人や、共感できる話に出会える人がいるかもしれない。

この本を読み終わった後、一人暮らしをしている人は家族の大切さを改めて感じ、連絡を取りたくなるかもしれない。ペットを飼っている人は今以上にペットを大事にしようと心に誓うかもしれない。恋人がいる人は今すぐ会いに行きたくなり、さらに愛おしく思うかもしれない。この本を読めば身の周りの大切な人に対する様々な感情が溢れ出てくるはずだ。

2ちゃんねるは匿名サイトで、書き込んだ人が分からないため誹謗中傷が多く見られる。そのため2ちゃんねるに良い印象を持っている人ばかりではない。しかしこの本を読んで不快に感じる人はまずいないだろう。むしろこの本に掲載しきれなかった話を読むために、2ちゃんねるの虜になる人も出てくるかもしれない。

今世の中はネット社会で、パソコンや携帯電話で検索すればたくさんの本が読めるようになっている。そのため書店で本を買う人が少なくなってきている。しかし、ページをめくり、本を読んでいるという実感を得ることは、本でなければわからない良さでもある。ぜひとも書店に足を運んで本の重みを感じてほしい。そして秋の肌寒くなった空気を感じつつ、この『泣ける2ちゃんねる』を読んでもらいたい。



▲泣ける２ちゃんねる

水滸伝 楊令伝

ここでは、本編『水滸伝（全十九巻）』と続編『楊令伝（全十五巻）』の二つを取り上げたい。どちらも中国宋王朝が舞台の北方謙三による歴史小説である。タイトル上は二つの物語に分かれているが、どちらも中国の宋代の末期が舞台だ。

大雑把なストーリーとしては、『水滸伝』で宋王朝末期の悪政に苦しむ民を救わんと替天行道の志を掲げて反乱を起こした人々を描いている。結果としてこの反乱は宋の禁軍という精強な軍によって鎮圧され、失敗に終わる。それからその数年後、生き残った者たちが新たな頭領、仲間と共に再び立ち上がり禁軍を倒し、新たな勢力金国及び国土が半分になった宋（南宋）、主人公たちの梁山泊の三国で争いをしながら新たな国の有り様を模索し生きていく、というのが『楊令伝』となる。

この二つの物語は宋王朝末期を描いた一つの物語であるが、やはりそこには明らかな違いがある。先に述べたように『水滸伝』は敗北や夢が潰える物語という色合いが強い。それに対し『楊令伝』は創造、あるいは建国の物語であり、その差異は特に登場人物の死に際し顕著だ。『水滸伝』では物語の終盤になるにつれて戦闘は激しさを増していく。そして登場人物のほとんどが己の信ずるものを守るため、壮絶に死んでいくのだ。涙がこみ上げてくると同時に、鳥肌が止まらない。

また、シリーズ合わせて三十四巻もあるこの物語の中で誕生し死んでいく人々もいる。そういう人たちは、読み手からすると子供の頃から知っている人であり、その生も死も心動かさずにはいられない。さらに『楊令伝』では『水滸伝』で死んでいった男たちの子供が成長を遂げ、志を胸に戦いに加わる。あの男の息子がこの立派な青年になったのかと、まるで親戚の子供が成長したかのような感情を抱かせてくれる。もちろん『楊令伝』でも多くの同志が死ぬが、こちらは先にも述べたように創造の物語であり、その死は『水滸伝』ほど壮絶には描かれていないように感じる。

さらにこの物語で特筆すべきは、戦場で華々しく散っていく人々だけでなく、兵站を担う者、交易を担う者、民政を行う者あるいは忍のように陰で情報をつかむために戦う者たちまでもが、戦場で戦う人々と同じくらい緻密に人物像が描かれているということだ。登場人物はゆうに百を超えるが、そのほとんどの人に感情移入ができるほど深く描かれているのだ。これほど壮大で心震える歴史小説はそうあるものではない。続編の『岳飛伝』が現在刊行中であり、こちらも非常に楽しみだ。読書の秋である今、ぜひ読んでみてほしい。

▲水滸伝・楊令伝